
百物語

奏いろは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百物語

【Nコード】

N4350X

【作者名】

奏 いろは

【あらすじ】

とある所で百物語をする子ども五人がいた。暗闇と揺らめく蠟燭の光の中、話はどんどん進んでゆく。最後に起こったことはいったい…？

話が進むにつれて明らかになってゆく謎。この不気味さにあなたは耐えられますか…？

ちょっと伏線の入ったホラー小説。

序章

せまい十畳の部屋に無数の蠟燭が灯っている。がらんとした本棚の中、端に寄せられたちゃぶ台の上、ささくれてガサガサになった畳の上。至る所で赤や橙にぼうつと光っている。いや、光っているとより光そのものが仄めいているみたいだ。

暗闇の中に蠟燭の灯りから何かが浮き出て見える。よくよく見るとそれは人間の頭で、部屋の真ん中に身を寄せ合うようにしてかたまっている。五つほど見え、そのうち二つは少女、三つは少年のようだ。無数の蠟燭と彼ら以外何も無い部屋で、それらは何かひそひそと言っている。彼らが何か言うたびに近くの蠟燭の炎がゆらゆらと揺らめく。そのちらちらとした灯りのせいで、彼らの顔はよりいっそう不気味に見えた。

「準備も整ったことだし、そろそろ始めるか。」

1人の少年がぼそりと言った。

「そうね。早くしないと夜が明けちゃうわ。」

今度は少女が言った。

「で、誰から始めるよ?」

五人の中で一番大柄な少年が言った。

「そうだな...」

1人の少年がふと考え込んで、「じゃあ、この鉛筆を倒してその先にいた人から時計周りに話をしようか。」と提案した。

皆静かに頷く。

言い出した少年は胸ポケットから鉛筆を取りだし、皆の真ん中においた。鉛筆を倒す、たったそれだけのことを皆息を詰めて見守った。少年は鉛筆を放し、それは音もなくゆっくりと倒れた。

その先にいたのは1人の少女だった。

「じゃあ、かなからお願い。」

もう一人の少女が話しかける。

「1番最初だ。とびきりのを頼むよ。」

大柄なのが言う。

かなと呼ばれた少女はすうつと息を吸い込むと仲間の顔を見渡した。

一本目：夢

えっと、これはあたしが体験した話なんだけど、ある日夢を見たの。

あたしは夢の中でジョンーうちの柴犬よーの散歩をしてた。周りは真っ暗だったけど、あたしは鼻歌を歌いながらジョンと散歩していた。現実でならそんな遅い時間に散歩に行かないし、怖いと感じるのに、あたしは何も気にせずに夜の道を歩いてた。

時間帯は覚えていないわ。どこを散歩してたのかも。しばらく、そうね、20分くらいジョンと歩いてた。そしたらね、いきなりジョンが歩くのをやめたの。ジョン、どうしたの？ってリードを引っ張ってもちつとも動かない。その時初めて夢の中のあたしはここは何処なんだろうとキョロキョロし始めた。そしたらそこはあたしがいつも現実で遊んでいる公園の近くだった。いつもは明るくてカラフルな公園が、不気味に見えた。それまでは全然怖くなかったのに。あたしは早く家に帰りたくなって、「ジョン、何してるの、早く帰ろう。ねえってば。」とジョンを力ずくで引っ張って、よじよじと歩きだした。でもジョンは金縛りにあつたみたいに動かない。あたしは半泣きになって、「ジョン、帰ろうよう。」って言いながら、さらにぐいぐいリードを引っ張った。今度はどんなに引っ張っても動かない。

すごく怖くって、もう涙が目にとまってた。泣きながらジョン、つてしばらく呼び続けてたら、いきなり、ひた、ひた、と足音が聞こえてきた。

それだけで心臓が飛び出そうなくらい驚いた。夜中に誰かが散歩してるんだわ、と思うおとしてたら、その足音はだんだんあたしの方に近づいてきた。来ないでよ、と思いながらあたしはその人から目が離せなかった。目はすっかり暗闇に慣れていて、その人が青いワ

ンピースを着た女の人だとわかった。あたしはその女の人をじっと見ながら動くことが出来なかった。ジョンもあたしと同じでぴくりとも動けない。

その女の方はあたしの50メートルくらい手前まで歩くと、いきなりピタツととまった。何なんだろう、と思ったたら、女の方が何の前触れもなく猛スピードであたしの方に走ってきた。

「キヤーーーーーーッ??」

人間の速さとは思えないスピードで、あたしは逃げることも動くことも出来ずにただ叫んだ。あつという間に女の方はあたしにばさつと覆いかぶさり、鬼の形相で睨んできた。

真っ赤な唇からさらに真っ赤な血が垂れていて、長い髪はボサボサに乱れていた。目が爛々と緑に光ってるの。あたしは涙を流しながら魚のように口をぱくぱくとさせていた。女の方はギロリとあたしの目を見て言った。

「……二……ツクナ……」

「え……?」

女の方がだらんと頭を垂らしたかと思うと、がばつと顔を上げ、

「コノ公園ニチカヅクナアアアッ?」

そこで記憶が途切れてて、目を覚ましたときは汗でびっしょりだった。

あたしは怖くてその公園で遊ばなくなった。

でもある日、友達が公園で遊ぼうと誘ってきた。あたしはあの夢のせいで怖くて、ゴメン、無理と言って帰った。

その日の晩、家でテレビを見ていると、買い物に行ってたお母さんがすっ飛んできて、「大変よ、かな?」と叫んだ。

「何が大変なの？」って聞くと、「あんたの友達が公園で…」

……あとはもう分かるよね…？

この話はこれでおしまい。

蠟燭の灯りが、一つ消えた。

二本目：ランニング夫婦

じゃあ時計回りだから、次はゆうじな。

ああ。

えーと、これは俺の体験談なんだが…

ある寒い冬の日のことだ。俺は自転車で塾から家に帰る途中で猫を轢いてしまった。真っ暗な道をライトをつけずに運転していたから、何かがいるということさえわからなかった。野良だったらしいけど、と思いながら近寄って見ると、それは首輪をつけていた。俺は怖くなって、猫をそのままにして帰ってしまった。

それから二週間くらいあと、俺が塾から帰る時間帯にランニングをする夫婦を見かけるようになった。冬になるとランニングをする人は増えるから、別に何とも思わなかった。

でも2日か3日くらい経って、あれ、おかしいな、と違和感を感じるようになった。他のランニングをしている人の横を通り過ぎる時は、息切れの音が聞こえるのに、その夫婦からは音が聞こえない。それどころか、呼吸をしているのかと不安になるほど胸が上下していないのだ。そんなことを思うようになってから、俺は通り過ぎる時、その夫婦をちらっと伺うなどをするようになった。

俺は夫婦を観察しているうちに、彼らの走るスピードがだんだん速くなっていくのに気がついた。でも呼吸音はしない。

ある日、夫婦の側を横切ると、妻の方が俺をギロリと睨んできた。俺は何だこいつ、とぞっとして、それからその道を通らないようにしようと思った。

でも、道を変えたその日、俺の目の前にその夫婦が現れた。
その時は何でこいつらがここにいるんだ、とパニックになりかけた。
何とかこらえて、スピードを上げて通り過ぎる。通り過ぎた瞬間、
夫婦が俺の方を180度首を回転させて振り向いた。
んで、猛スピードで俺の方まで揃って走ってきた。

あ、なんかさっきの話とかぶってる？まあいいか。

もちろん俺は全速力でこいで逃げたわけよ。追いつかれないように
無駄に道を行ったりきたり曲がったりして、奴らを撒いた。
そして、無事家に到着。

あんときは本当にホッとした。

いつも持つてる鍵で玄関の鍵をあけた。

そして「ただいま」と言いながらドアを開けると、

……奴らがいた。

2人揃って俺んちの玄関に立っていた。2人とも無表情で俺を見ている。

「え…な、んで…？」

顔面蒼白の俺に奴らはニヤリと笑った。夫の方が手に何か首輪らしきものを持っている。

そいつらはゆっくりと俺に歩み寄り、

そして俺は……

あ、ちなみに、この話は俺のじゃなくて友達の体験談だった。

そういつて蝋燭の火を消した。

三本目：母の実家で

めいの番だよ。

わかった。じゃあ話すよ。

友達から聞いた話なんだけど、その子のお母さんの実家がすごい山奥でね、二年に一回行くか行かないかって頻度で泊まりにいくの。その子が小学校5年生の頃だったかな、お母さん方のお父さんが亡くなつて、家族でその家に行ったんだって。その子の家は4人家族で、その子とお母さんとお父さんと当時中学校1年生のお兄ちゃんがいた。

山を幾つか越えてその家に行くと、おばあちゃんが一人ぽつんと縁側に座っていた。その子のお父さんとお母さんはおばあちゃんに何か言いに行き、あんたたちは遊んでなさいと子どもたちを追いやった。

遊べと言われたものの、兄妹は特にすることもなく持ってきていたゲームをし始めた。お腹が空いたな、と思って2人は両親とおばあちゃんがいる部屋に行った。でも誰もいなかった。2人はおばあちゃんと両親は晩御飯の買い出しにでもいったんだろう、とゲームを再開した。寝転んでやっていたものだから、何時の間にか眠ってしまった。

その子が目を覚ますとお兄ちゃんがいなかった。トイレかな、と思っただけその子はまた寝入ってしまった。それからすぐだったのか、それともどれくらいか時間が経ってからなのかは覚えていないけど、ただいま〜と両親の声がしてその子は目が覚めた。

おかえり、と玄関にでて行く。

「どこ行つてたの？」

「晩御飯の買い出しにスーパーに行つてたのよ。お菓子も買つてあるわよ。」

「そつか。…あれ？おばあちゃんは？」

その子はおばあちゃんがないことに気づいた。

お母さんがきよんととして答える。

「え？おばあちゃんは買い物には来てないわよ。孫と遊んでるからつておばあちゃんが言うから。」

「え…？」

その時、なんでかわからないけど、その子には悪い予感がしたんだつて。

その子は弾かれたようにいきなり家中を走り回った。お母さんとお父さんはその子の行動にびっくりしてたつて。その子は全ての部屋を見たあと、

「お兄ちゃんがない？」

と叫んだ。

お父さんとお母さんの表情が凍りつく。

そこからなんだか尋常じゃないということ、家族でおばあちゃんとお兄ちゃんを探し始めた。

「おばあちゃんあーーん」

「お兄ちゃんあーーん」

皆ありつたけの声を出して叫んだ。

田舎で家が広いから、探すのは大変だったつて。その子がお兄ちゃんと叫んでたら、庭の方からかすかに物音がする。

両親を呼んで、庭を捜した。そして釘で打たれた蓋で塞がっている

古井戸から音がしているとわかった。

お父さんが蓋を壊して覗きこむと

「誰か助けてーーーーっ？」

と叫ぶお兄ちゃんがいた。

お父さんがロープを垂らしてお兄ちゃんを引っ張り上げて助けた。

「なんで井戸の中になんかいたんだ？」

お父さんが聞くと、お兄ちゃんが

「トイレに行つて？トイレにおばあちゃんがいる??」

と言った。

でもトイレも捜したけどおばあちゃんはいなかったよ、とお母さんが言つと、絶対いる！つてお兄ちゃんが怯えているように言った。

皆でトイレに行くと、トイレの灯りがついている。

「さっきおばあちゃんたちを捜したときに消したはずなのに…」

お母さんの顔色が少し悪くなる。

お父さんがドアを開けると、

おばあちゃんがいた。

「キャーーーーっ？」

お母さんとその子が悲鳴をあげた。

そこにいたのは、

おばあちゃんの首吊り死体だった。

皆どうすればいいかわからず、警察を呼んだ。

警察は死因を自然死と断定した。

そして、死後一週間以上経っている、とも…。

「おばあちゃんから電話があつたの、3日前だわ…」

あとでお兄ちゃんに話を聞くと、おばあちゃんが部屋に入ってきて、遊ぼうと言うからお兄ちゃんと一緒に遊んであげることにしたんだって。そしてついて来ると言われついて行くと井戸の中に閉じ込められた…。

不思議な体験だつたって言ってた。

トイレもくまなく搜したのに、お兄ちゃんに言われるまで死体を見つけられ無かったのも不思議だって。

あと自然死なのに首吊りの形で死んでいたのも…

一応友達に聞いた話はおわり。

フツと短い音がして、蝋燭の火がまた一つ消えた。

四本目：音楽室の呪い

次はじゅんすけだな。

最初に言つとくと、俺の話は作り話だ。一部で流行ってるふつうに聞くと全然怖くないが意味を考えると怖さがわかるってやつ。知ってる？まあ、とにかく話すぞ。

俺は学校に明日提出する宿題を忘れてしまった。しかもそれに気づいたのが夜の11時でさ。怖かったけど次の日みんなに笑われながらペナルティで校庭10週走るくらいなら、夜の学校に侵入するほうがまだましだってことで取りに行った。

夜の学校はやっぱ怖くて門の前に来てから帰ろうかと思ったくらいだ。

でもここで帰ったらただのビビリだってことで、フェンスを乗り越えて学校の中に入った。

学校の中は真つ暗で、廊下を歩いているとやたら自分の足音が響いた。俺の教室は二階にあるから壁伝いに階段のどこまで歩いて行つて、ゆっくり階段を上った。

階段をのぼりながら、俺はクラスで噂になっっている音楽室の呪いという怪談を思い出してしまった。二階にある音楽室から午前0時ちようどにピアノの音と悲鳴が聞こえてきて、その音につられて音楽室を覗きそれを見てしまうと呪い殺されてしまう、という話だ。俺はこういうのには興味がないんだが、クラスの女子のYに無理やり聞かされてこの話を知った。Yは美人でピアノもうまいのに、こういう話が好きでやたら怪談話を提供してくるところはどうかと思う

んだ。くだらないと思いながら俺は足がすくんでしまった。なんでこのタイミングであの話の話を思い出しちゃうんだよ、と自分を呪った。階段をようやく半分上った。

もしかして、と俺はよせばいいのになんとなくライトをつけて腕時計を見た。

午前0時ちょうど…。

ぞくつと背筋が凍った。

音楽室の前を通りたくなかったが、俺の教室には音楽室の前を通らないとたどり着けない。

階段を上り終えて、また壁伝いに廊下をゆっくり歩いて行った。もうすぐ例の音楽室が見えてくる。

心臓が壊れそうなほどバクバクいつている。俺はいつの間にかじつとりと汗をかいていた。

自然と足が止まる。

落ち着け、そんな音聞こえるわけじゃないか、呪い殺されるわけ、ないじゃないか。

俺はごくりと音を立てて唾をのみ、そろそろ足を一步踏み出そうとした。

……………?? ?? ? ??? …

「…………え？」

俺は思わず声を漏らした。

こんな夜中にピアノの音…？誰が？

まさか…………

次の瞬間キーツというような甲高い音が聞こえてきた。

これは、例の、悲鳴…？

俺は少しも動けなかった。

でも、なぜだろう。怖いのに俺はすたすたと歩いて行って、音楽室のドアを思い切りあけた。

がららつと音を立てながら開けると、ピアノの音がぴたりとやんだ。そしてぱつと明かりがついた。

俺はびくりと体を震わせた。

明かりをつけたのは、趣味の悪い真つ赤なＴシャツを着た俺の担任の音楽教師だった。

「あれ、先生？」

俺は拍子抜け、間の抜けた声を出してしまった。先生は大きな立派なグランドピアノの前に立ちはだかる体で、ポケットに手をつまみ込んで立っていた。ピアノは大事そうにほこりよけの布を足までかけられている。

「おや、K君じゃないか。どうしたんだい、こんな夜中に。」

「明日出す宿題を教室に忘れちゃって…。ピアノの音が聞こえたから誰かいるのかなと思って。」

「そうかそうか。怖いだろうに。今教室の力ギを持っているから開けてあげるよ。そして早く帰りなさい。」

「ありがとうございます。先生。」

俺はかなりほっとした。

先生は教室の力ギを開けてくれて、俺は無事宿題を持って家に帰った。

さあ、これから徹夜で宿題だ。

次の日、宿題は朝のホームルームで回収された。結構宿題忘れたやつが多くて、怖い思いして学校に取りに行った俺は何だったんだよとちよつとがっくりした。

「ほら、早く席に着きなさい。」

先生がみんなに向かって言う。今日は普通の真っ白なＴシャツだ。奥さんにでも趣味の悪さを指摘されたのかな。

「今日は誰も休んでないな。」

「あ、先生、Ｙさんがいませうん。」

「はい、Ｙが欠席つと。」

いつもの朝の風景だった。

音楽室の呪いなんてないってわかったし、すがすがしい朝だなと俺は眠い目をこすりながら思った。

…そんなに怖くなかったかな。

まあいいや。

ふつと息を吹きかけ、ろうそくの火を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4350x/>

百物語

2011年10月31日20時25分発行